

ハワイ紀行

沖田行司

一 ワイキキで語る日本

腕時計は午前二時を少しまわったところを指していた。飛行機は着陸体制に入った。雲が途切れた。ハワイの海には昇ったばかりの朝日が眩しく照り返している。慌てて時差を調整する。こうして、私とハワイの出会いが幾度となく繰り返される。

ハワイはもともと日本人に馴染みの深い「アメリカ」である。日米開戦の勃発の地であり、日本人と民族を同じくするアメリカ人が多く住むところである。とりわけ、日本の経済発展と共に、海外旅行の大衆化現象を齎したのもハワイである。

ハワイのホテル産業の九十%ちかくが日本の資本で占められ、今や経済占領地の様相を呈している。高級ホテルが集中するワイキキには、「ハワイは外国ではないのだ」と認識する物知り顔の観光客や「何処でも日本語で事が済む」と豪語する金満家の日本人が溢れている。しかし、このことが逆に本当のハワイが見えにくくしているのも事実である。

アメリカ合衆国の五十番目の州であるハワイ州は大小八つの島からなっている。州

の総人口の八割が集中しているオアフ島は、州庁の所在地で政治・経済の中心地である。オアフ島には、コアラウ山脈とワイアナエ山脈という二つの険しく切り立った山々がほぼ南北に平行して走っている。ハワイには富士山より高い山が2つもあり、中でもビッグ・アイランドと呼ばれているハワイ諸島最大のハワイ島にある標高四二〇五メートルのマウナケアでは五月の半ばまで雪が降る。ハワイでスキーが楽しめるというのも案外知られていないようである。

このように、山の景色と海の風景、ホテル市の高層ビル群とハワイ王朝時代の歴史的建造物がみごとに調和しているのがハワイの魅力でもある。

ホノルル国際空港がハワイの表玄関である。ここから、ホテルが建ち並ぶワイキキまでリムジンバスで三十分ほどである。今は観光客で賑わうワイキキも一昔前は水田が広がっていた。その風景を記憶している人はほとんどいない。ワイキキのホテルに日本の資本が入ると、きまつてホテル内の空間が日本人専用の土産物売場に改築さ



れ、熱海や白浜の温泉街と本質的に変わらなくなる。

土曜日や日曜日になると、ワイキキの木陰に年老いた日系人が集まってくる。日本人観光客を相手に、自分達の歴史を語り、そして彼らの父母や祖父母が生まれた日本との距離を確かめる事によって、自らの人生をあらためて振り返っているようである。身寄りの少なくなった彼らにとって、

ワイキキは日本との出会いを適えてくれる数少ない場であるのだ。

ワイキキのメイン通りはカラカウア・アベニューと名付けられている。この通りを西に向かつて歩いていくとハワイの近代化に貢献したカラカウア王の銅像がみられる。日本とハワイとの太い絆を結んだ人物である。日本からのハワイ移民は明治維新の年に始まる。しかし、官約移民として本格的な移民が開始されたのは一八八五年以降のことである。このきっかけを作ったのがこの王様である。物語りは明治の時代に遡る。当時、ハワイ王国は西欧列強の力の均衡の下に、辛うじてその独立を保持していた。一八八一（明治十四）年、世界一周の旅の途上にカラカウア王は日本に立ち寄った。この世界一周の旅の目的は日本の訪問にあったともいわれている。桜の季節にはまだ少し早い三月十日の夜、カラカウア王は側近の白人の顧問大臣には知らせず、日本人通訳を一人だけ伴って、赤坂離宮の仮御所で明治天皇と会見した。アメリカのハワイ併合を危惧していたカラカウア王は、カイウラニ王女と山階宮親王（後の

伏見宮）との養子縁組を結び、日本とハワイを中心にした太平洋同盟のようなものを構想し、西欧列強と対抗しようとしていた。加えて、日本人移民を派遣することなどを申し入れている。王女と親王との婚約に關しては、皇室会議でいったんは決定したが、山県有朋の強い反対により、移民の派遣のみが実現することになった。やがてハワイはカラカウア王の危惧した通り、一八九三年にアメリカの海兵隊の支援を受けた形で共和革命がおこり、その五年後にアメリカに併合された。その後、数十年にわたって州への昇格運動が行なわれたが、日系人が占める総人口の割合が高かったこともあり、すぐさま立州が認められたわけではない。ハワイがアラスカについて五十番めの州として認められたのは一九五九年のことであった。それまでには、さまざまな偏見と差別に満ちた受難の歴史を経なければならなかった。

二 ダウン・タウンに見るハワイ

ワイキキからバスで二十分ほど西へ行くダウンタウンに着く。ワイキキが歴史と文化と時間とを喪失した異界としてのハワ

イを象徴するならば、ダウンタウンはハワイの近代史を鮮やかに今に残している、生活感の溢れた地域である。その中央に、カラカウア王が世界旅行から帰国してまもなく、ビクトリア風の建築様式を取り入れて造らせたイオラニ宮殿がある。敷地内に戴冠式台をもつこの宮殿はアメリカ合衆国唯一の宮殿であり、かつてのハワイ王朝の栄華を偲ばせるに十分な威厳と風格を今だにたたえている。道路を隔てて、正面にハワイを統一したカメハメハ王の銅像がある。

民族衣装を纏い、左手に槍を持ち、右手を高く差し上げている姿は、現在のハワイに何を訴えているのであろうか。また、この近くには、ハワイのアメリカ化を象徴しているかのように、ニューイングランドを思わせるような赤煉瓦造りの建物がみられる。このような歴史的な建造物の周りを取り囲むようにして州政庁や裁判所、連邦ビルがたち並んでいる。

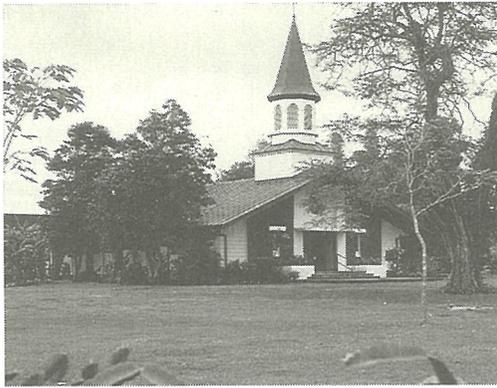
イオラニ宮殿に沿ってさらに西に歩くとビジネス街にでる。ハワイでは、スーツにネクタイ姿の人を見かけることはあまりないのであるが、経済と政治の中心地である

ホノルルのダウンタウンでは、これが自然にみえる。ハワイを訪れる日本人の多くがワイキキ感覚で教会やビジネス街のオフイスに顔を出して響感をかうことがしばしばある。かつて、ハワイ大学の教授から半ば軽蔑にも似た口調で次のような話を聞いた。ある屋下がり、ハワイ大学の教室で環境と自然に関する熱心な討論がおこなわれていた時、手に飲み物とハンバーガーをもつた日本の若者の一群が無断で教室に現われ、日本語で盛んになにかを叫んだそうである。忽ちキャンパスポリスのお世話になったのであるが、彼らが持っていたハワイ旅行の案内雑誌に「ハワイ大学へ行ってキャンパスライフを楽しまう。ハンバーガーをかじりながら講義にでてみよう。きつとウエルカムされるであろう」と書かれていたそうである。日本人のハワイ観を示す話として実に興味深く聞いた。

ビジネス街から数ブロック西へ行くと中国人街がある。その周りに映画館や飲食店が立ち並ぶ。陽が落ちて夜の帳がおりる頃になると、様相は一変する。根が臆病な質であるので、このような所とは無縁なので

あるが、たまたま、垣間見ることがあった。ハワイを底辺で支えているエネルギーを見た気がした。かつて、ここには日本人街もあった。しかし、アメリカがハワイを併合して間もなく、中国人街にペストが発生した。蔓延を恐れた当局は中国人と日本人が群居していた地域を焼き払った。それ以降、日本人はダウンタウンに戻ろうとはしなくなったと言われている。この焼き払いについては諸説があるが、真相は必ずしも明らかではない。

中国人街を通りぬけて、海岸線沿いに出るとアロハタワーが見える。ホノルル港の入口に聳えるこの十階建てのタワーは、かつてハワイ航路が華やかにし頃のハワイのシンボルであった。ジェット機時代になり、ハワイ各島間の定期航路も廃止されたこともあってか、ホノルル港に賑わいはない。この港をとり囲むようにして、サンドアイランドと呼ばれる島がある。真珠湾攻撃の直後、日系人社会の指導的立場にあった多くの人がF・B・Iに連行され、隔離収容されたところである。以前は軍の施設があり、容易に立ち入ることが出来なかった



のであるが、現在では陸続きの公園となっている。ここからアロハタワーを正面から見てとることができる。しかし、訪れる人は疎らである。潮風が強く、観光客が期待するハワイはそこにはない。ここに収容された人々が、ここからアメリカ本土の砂漠地帯に設けられた収容所に移されて行くのを見送ったのはこのアロハタワーだけであつた。

三 ハワイからのメッセージ

オアフ島にはH-1、H-2、H-3の三つのフリーウェイがあるが、これらの終点はいづれもアメリカ空軍の基地に直結している。四時間少しあれば車で一周することができ。但し、島の北西にあるレーダー基地にいたる道路だけは途中でできれているので、厳密に言えば一周することにはならない。ワイキキをでて車を走らせると、ハワイ全体が太平洋に浮かぶ不沈空母であるという実感を身をもって体験することが出来る。事実、ハワイ経済の大部分は、軍事基地に依存している。先程の湾岸戦争にも一万人近い軍人がハワイから出兵していることからわかるように、現在もなお太平洋の重要な戦略基地であることに変わりはない。ハワイは南の楽園で平和な観光地であるというイメージがいつの間にか作られてしまった。真珠湾（パールハーバー）は現在も重要な役割を果たしている軍港である。真珠湾攻撃の際、多くの乗組員と共にマストの一部を残して海底に横たわった戦艦アリゾナは記念館となっている。毎年十二月七日を迎えるとリメンバー・パール

ハーバーの大合唱がおこる。ハワイに定住している人々はそれほどでもないが、当日アメリカ本土から来たアリゾナで戦死した遺族の関係者などが、アリゾナ記念館ではしゃぎ回る日本の若者を見て眉をしかめるのを見るにつけ、日本の教育の貧困を覚えずにいられない。

真珠湾から北に向かうと広々としたパイナップル畑にでる。畑の真ん中を道路は一直線に続いている。相当のスピードで車を走らせても畑は続く。やがて正面に海が見える。ノース・シヨアと呼ばれるサーフィンの名所である。この地域は、オアフ島でも数少ないシュガープランテーションの名残の風情をのこしている。コアラウ山脈はさんでワイキキやホノルルの反対側は裏オアフと呼ばれている。裏オアフには観光化されていないハワイがたくさんある。素朴で質素な家々が建ち並んでいる。海の色も山の姿も、ワイキキで見る風景とは一味も二味も異なる。しかし、気になることがある。立地条件の悪い所に決まってハワイアンが居住していることである。日本人らによる土地やアパートの買い占めにより、

住居費が高騰し、路上生活を余儀なくされている人々もすくなくない。彼らの中にハワイの独立を主張する運動が根強くあるのも頷ける。

ハワイでは人権問題に敏感である。多様な民族が共存して「アロハ精神」の下に一つの共同体を作っていることもあり、絶えず差別の解消に向かって努力している。「ハワイはアメリカではない」という言質はハワイの州昇格に反対したハオレ（白人）の合言葉であった。ハオレと同じ視点でハワイを見る日本人も多い。日頃、人権問題に関心を持つ人でさえ、ハワイが象徴する意味については案外無頓着な事が多い。しかし、土地を奪われ、民族文化に執着することによって差別された最も虐げられ先住民のハワイアンが「ハワイはアメリカではない」と言う場合とは、その意味は自ずと異なってくる。

裏オアフに限らず、ハワイを歩いてみると教会が多いことに気づく。裏オアフの素朴なカトリック教会の建物を見入っていると、どこことなく懐かしい白黒の映画を見ているような錯覚に陥る。これがホノルル市

内に出ると、ゴシック様式を思わせるような荘厳な教会と出会うこともある。中でも、ホノルルの中心地に高知城の天守閣をかたどって建てられたマキキ教会は人目をひいている。この教会を設立したのは奥村多喜衛である。奥村は同志社に学び、一九八四（明治二十七）年にハワイに渡って伝道活動をするかたわら、日本語学校を創設して移民教育に着手するとともに、日本人移民の生活改良や矯風運動に貢献した人物である。日本人移民が出稼から永住へと変わり、やがて日系人社会を形成するにあたり、奥村と同じく多くの同志社出身者がハワイにきて活躍した。同志社の総長をつとめ、後にハワイに渡り、一九二一年にハワイ大学で日本歴史及び日本文学の講座を開いた原田助もその一人である。その他、ハワイの日系人社会に貢献した同志社人を挙げれば枚挙に遑がない。

一九一一年に日米の親善をはかるために両国の学生を交換留学させることを目的としたフレンド平和奨学金が設立された。日本人側の委員長には大隅重信があたり、新渡戸稲造や渋沢栄一、尾崎行雄などが委員

に名を連ねている。日米関係に暗雲が立ち始めた一九二七年に、フレンド平和奨学金はハワイの日系二世を日本に送ることになった。これに尽力したのが同志社であった。以後、第二次世界大戦が始まるまで、ハワイと同志社は文字通り日米の懸け橋となり、研究者や学生の交流が行なわれていた。同志社のハワイ寮はその名残である。こうして同志社で学んだ多くの日系二世はハワイの中心的存在となり、諸々の分野で活躍した。日本が敗戦で打ち拉がれていた時、ハワイの関係者が寄付を募って琵琶湖畔の建物を買収して同志社に寄贈した。今はない唐崎ハワイハウスである。

一九八九年に同志社大学とハワイ大学の間で交換留學生の協定が結ばれた。同志社とハワイの関係が途絶えて約半世紀後のことである。同志社にとっても、日本にとっても、ハワイは貴重なメッセージを発信している。「二十一世紀の実験場」からのメッセージをどのように受信するかは、我々の国際感覚の質を試すものとなろう。

（日本文学部教授）